

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	長田和也
論文題目	近世遊里文藝の研究—近世中期から明治期にかけて—
審査要旨	
<p>本論文は、三部構成で、全体が十一章、さらに冒頭に序論、結尾に終論がある。終論の後に附録が二篇添えられていて、冒頭には凡例が、最後尾には初出一覧を付す。</p> <p>本論文は学位申請者が大学院入学後、およそ十年間に亘って展開されて来た研究活動の中で、全国規模の学会誌(査読付)に投稿し、掲載された論文六本を基礎に、それに加えて同人誌や所属機関の紀要などに発表した論文に書き下ろしの論文を加えて構成されている。当然のことながら、各章の論文は全体を貫く問題意識に副うように、書き改められていて、各章が緊密に結びついている。そのことは各章の文章の中においてしばしば前接する文章や、後続の文章の内容に言及する文言があることによって示されている。また副題であるが、近世中後期に書写、出版された書籍が長く読みつがれ、明治に至っても広い読者層を獲得していたことや、近世中後期の遊里文藝に関する価値観や倫理観が、近代に入った後も継承発展していたことを本論文は随所に指摘しているので妥当なもの判断される。</p> <p>全体を貫く問題意識は極めて斬新なもので、従来の遊里文藝、または遊里文藝に係わる戯作を研究対象とする先行研究が孕む問題を序論において、列挙別判する。たとえば、名著『戯作論』の著者にして、近世文学研究の泰斗と称される中村幸彦氏の功績を十分に認めながらも、近世文学を第一文藝、第二文藝と二分して、遊里文藝、戯作を第二文藝に属せしめ、第一文藝に盛り込まれている「思想性」や「人間性」というものが、没個性の類型描写を事とする第二文藝には見いだせないとして、遊里文藝、戯作を、漢詩文や和歌によって代表される第一文藝よりも劣るものとして把握する姿勢には疑義を呈する。また、中村氏が第一文藝を評価する理由が、その「思想性」、「人間性」が、時代が進むにつれて、「近代」により近くなっているからであるとする、進歩史観に依拠する研究姿勢にも疑義を呈している。中村幸彦氏の近世文学研究は、雅俗のあらゆるジャンルに亘っていて、各種の古典文学全集、特に日本古典文学大系(岩波書店)、日本古典文学全集(小学館)における、近世の小説、詩歌、随筆など多岐に亘る注釈の正確さ、精緻さは正に空前絶後のものである。しかしながら、中村氏の各作品に対する文学史的把握の態度は、作品の分野間に優劣の序列を付け、無条件に近代文学を、近世文学よりも進化発展したものと位置付ける先入観と無縁ではない。学位申請者は、かかる作品間に序列を付ける研究態度、進歩史観による文学史の呪縛から脱するために、斬新な問題意識に基づく研究姿勢を以て、本論文執筆に取り組んで、成果を挙げている。</p> <p>学位申請者の斬新な問題意識、研究態度のひとつは取り扱う遊里文藝が、第一文藝に属する漢詩文によっても散文韻文を問わず、さまざまな文体で表現されていることに着目して、従来の戯作研究者が得てして等閑に附して来た漢詩文が表現する遊里における「人間性」、「思想性」を追究しようとしていることが挙げられる。日本漢詩文は、従来、中国文学研究者からは亜流として貶められ、日本文学研究者からは和歌和文ではないという理由で、日本人が書き綴ったものでありながら、中国文学研究者が扱うべきものとして敬遠されて来たわけである。その結果近世近代の膨大な日本漢詩文が読み解かれることもないまま放置されてきた。しかしながら、本論文が扱う遊里を詠じた竹枝詩(第一部第二章)や蒲生重章の漢詩文(第三部第二章第三章)は、第一文藝に属せしむべき押韻平仄などの規律や型を守る整齊美を備える作品でありながら、和文と拮抗して、あるいはそれ以上精緻に遊里における「人間性」や「思想性」を具現化する作品であることを論証する。そのことが中村氏のような傑出した研究者ですら陥っていたジャンル間に序列をつけるという悪弊から各作品を救いあげることに繋がっている。日本漢詩文において当時の制作者が韻文と散文の双方をなしえたという実態に鑑みて、韻文と散文とのどちらか一方のみを扱って、他は等閑に附すという態度から免れているのも、従来の文学研究の陥った弊を是正する成果を挙げることの裏付けとなっている。また中村氏が遊里文藝、戯作の限界とみ</p>	

なした類型描写、あるいは型を尊重する近世的意識を、むしろ自由が行き過ぎて放縦に陥り、窮極的には経済至上主義に吸引されがちな近代文学研究に対峙せしむべき、「人間性」、「思想性」を明確に把握するための枠組みとして、遊里文藝や戯作に共存する「型」として積極的に評価することに本論文は成功している。ここで中村氏が近世文学では第一文藝にのみ看取され、近代文学を待って十全に発現されるとされる「人間性」「思想性」について付言しておくべきであろう。文学作品における「人間性」「思想性」は、個々の作品の表現様式、つまり言葉を通してしか把握できるものではない。作者が書き綴った言葉や文章を緻密に、正確に理解することを措いては、「人間性」も「思想性」も浮き彫りに出来るものではない。言葉や文章というものは、文法や韻律など一定の規範に則って構成されるものであり、その規範を十全に体得して、自在に表現しうる状態に達することが、いわゆる文体の獲得なのである。中村氏が戯作の貶価すべき要素とした「類型的描写」というものは、好意的に換言すれば、作者が言葉や文学作品に関する一定の規範や型、文法、ルールを十全に体得しているということでもある。私見によれば中村氏が「近代文学」において実現されているとする「人間性」「思想性」の発揚ということも、言葉それ自体や言葉によって表現されるモラルというものとせめぎ合いを通じてしか表現されないものであり、それはやはり「型」であり、作者の精神が弛緩して新たな「型」の探求への努力を怠れば、たといすぐれた「近代」の作家といえども、すぐさまそれは二流の戯作者同様に、「類型」あるいは「二番煎じ」に墮するのではあるまいか。その意味で本論文が、洒落本の型や遊里のしきたり、漢詩文の韻律やそこに表現された道徳や美意識という「型」を丁寧に把握しようとした研究姿勢には、これからのありべき文学研究の態度が示唆されているのではないか。

ただし、ジャンルや時代の障壁を撤して、遊里文藝を論じる際に、第一文藝であろうが、第二文藝であろうが、作品の舞台が遊里で、主人公が遊女というだけで、どの時代のどの作品も等し並みに扱ってしまうジレンマに陥っていないかどうかの検証と反省の必要性が常につきまとう。その厳しい反省がないと遊里文藝でどの時代のどんな作品を論じても金太郎飴のような論に終始しかねぬ危険と背中合わせであるのが、学位申請者の提示する斬新な問題意識が常に抱える自己撞着であると思われる。

以上を審査報告の序論として、以下各部各章に即して、本論文の達成を具体的に紹介したい。

第一部は二章構成で、吉原を舞台とする『遊子方言』と新宿を舞台とする『甲駅新話』という二作品を扱っている。学位申請者の研究生生活の初発時に発表されたものであるが、上述した先行研究の抱える問題に正面から対峙したという点で、本論文の中でも最も注目すべきものと考えられる。二作品は代表的な洒落本とされるもので、すでに注釈なども備わるが、読み方という点では、上述した作品の提示する「型」を「類型」として否定的にしか捉えない陥穽から脱しているものがなかった。『遊子方言』については、主人公格の「息子」と「通り者」の所属する階層について、従来は武家か町人かどちらか一方に属せしむることに終始していたのを、どちらにも読めるということを論証しようとしていて、刀などの装身具や本所という主人公が関わる土地の素性の再吟味を通しての論証過程は説得力を有する。『遊子方言』の作者の設定は、それこそ町人と武家との「隔てを撤せんとす」(山口剛) 試みであったと主張するのである。

中村氏の姿勢は「息子」「通り者」をいずれも武家と固定し、対して佐藤要人氏などは洒落本のみならず、遊里文藝、戯作を「庶民」=町人野本規定するもので、支配階級としての武家を排除する姿勢に支えられていた。ここには傑出した古典文学研究者もまたマルキシズムの階級史観や進歩史観に囚われていたということが感得される。

学位申請者においては、『遊子方言』の男性客が、武家、町人どちらの階層にも読めるということが、どちらの読者層からも好評を博しえた秘訣となっていることを徹底的な書誌調査などによって更に積極的に主張する必要があったかも知れない。『甲駅新話』については新宿という岡場所の「しきたり」、型としての「まわし」という風習に着目し、その精密な把握を通して、遊女と客との「人間性」を浮き彫りにすることに成功しているものと評価できる。ただし、『遊子方言』の作者については、すでに中野三敏氏の卓抜な論があるので、作者の個性や境遇と作品の構造、趣向についての関係性などの考察があつてしかるべきであった。

第二部は五章から成り、近世後期の考証随筆や滑稽本、人情本、合巻、中本型読本において、近世前期の

吉原に関する考証的関心の高まりを精緻な写本、版本の書誌調査や書画の解説を通して浮き彫りにしたものである。ここにおいて、学位申請者は、漢詩漢文と和文とのくずし字や草書、印章などの篆書の解読能力を発揮していて、現在、古典文学研究者の間でも失われがちな文献読解のために必要なレテラシーを十全に備えていることが理解される。吉原や遊女に係わる考証を生かした戯作が決して洒落本だけに止まるのではなく、滑稽本や人情本、読本の作者をも捉えているもので、ジャンル間に序列をつけてり、各ジャンルを時代が下るほど優れた物となるという進歩史観で捉える弊を免れていることで、ジャンル間の障壁を自在に乗り越えて、洒落本や人情本の作者、遊里文藝を制作する者であっても、文言白話の小説や漢籍を典拠とする都賀庭鐘や曲亭馬琴の読本にも規範や趣向を求めていたこと、あるいは戯作とは一線を画して、より上位に位置するとされてきた読本というジャンルにおいても、教訓性を強調するという形で遊里や遊女の世界に取材していたという実態を論証している。ただし、戯作という文藝が、歌舞伎、人形浄瑠璃といった演劇と密接不可分の関係にあることについての、学位申請者の目配りは必ずしも十全ではなく、第二部においても、たとえば第四章『紅葉塚』という作品と演劇の伊達騒動物との関連などに言及があつてしかるべきであった。同じ第四章では『紅葉塚』の口絵に記されている発句が、元禄期の俳書『焦尾琴』から引用されており、かつそれを作品の内容に即して改変を加えていることを論じているが、これは『紅葉塚』という人情本という散文ジャンルの作品の中の、韻文の機能を考察する点で、韻文と散文との隔てを取り払う試みという点では評価できるが、一方ですでに山東京伝の作品に元禄俳書『焦尾琴』の援用はなされていて、その方法の踏襲である点などをさらに論じるべきことが今後の課題となった。

第三部は明治期に綴られた漢詩文、蒲生重章著『近世佳人伝』に盛り込まれた、吉原などの遊里で活躍した人物、遊女のみならず、さまざまな男性客の言動が、韻律などの規範の厳しい漢詩文という媒体を通して、生き生きと表現されていることを論じる。特に、学位申請者が、第二部で精緻に書誌的考証を展開し、戯作の趣向の淵源をなしていることを立証した『異本洞房語園』や『北里見聞録』などの吉原に関する考証随筆が、漢詩文で綴られた『近世佳人伝』にもまたさまざまな趣向や設定を提供していたことを論証した点は、見事である。

これらもまた、漢詩文を第一文藝、遊里随筆や戯作を第二文藝として、両者の間に序列、障壁を設けるという従来の研究史の陥穽から脱しえたために挙げられた成果であることもくどくどはなるが力説したい。学位申請者は『近世佳人伝』に登場する遊女や藝者における明治維新後の世相の混乱にともなって一般社会では見失われがちであった道義や真情を美德として保持する存在として描かれていることを論じているが、そのような遊廓に生きる女性の倫理観と背中合わせにして、彼女たちが漢詩と和歌、俳諧などの文藝の嗜みをも保持していたことを力説している。一般的には、遊女の詩文の嗜みは、大名道具とも称された大見世の花魁が、客である大名高家や旗本といった武家の高い教養に合わせるために培われていたとされるが、遊女たちの書画、詩文、音楽に関する教養の高さは、彼女たちの堅固な美意識や倫理観とも緊密に結びついていて、素人女性よりにとって理想像たりえた玄人女性の品格というものをさまざまな面で支えていたものであった。そのために学位請求者がこの第三部において『近世佳人伝』に登場する遊里に生きる女性たちが、武家にも劣らぬ詩文に関わる高い教養を備えていることを著者蒲生重章が賛美する傾向にあることと、そのような遊女の詩文の教養を賛美する傾向が、学位請求者が第二部第三章で論じた式亭三馬の合巻『契情畸人伝』においてもまた指摘された所であったことは、これもまたジャンルや表現様式に関わらない近世中後期から明治期の遊里文藝の特質を見事に剔判した達成なのである。

第三部で学位請求者は、『近世佳人伝』の中に登場する漢詩漢文を、韻文と散文とのジャンルに大きな区分や序列を設けずにやすやすと行っている。しかしながら、それぞれのジャンルに内在するさまざまな規律について、漢詩ならば押韻平仄、詩体などについての基本的認識は信頼すべきレベルに達していると思われる。これは学位請求者が早くから、漢詩文を読む研究会などに参加し、優れた先輩研究者に接して薫陶を受けた成果のあらわれであると判断される。通常中国古典文学の研究対象とされる北宋、蘇軾の漢詩と日本のもと尊皇攘夷の志士にして、後に医師となり、かつ漢詩文をよくした蒲生重章の漢詩とを同じ俎上で扱って比較し、正確な評価を下している。さらにいえば、今回の学位請求論文には間接的にしかその成果は盛り込まれていない

が、近世期から明治期にかけての漢文の尺牘やくずし字でしたためられた候文の書簡についての、学位請求者の読解能力は極めて高いレベルに達している、その実力を、継続的に参加している書簡文解説の研究会において、後続する研究者の育成のために惜しみなく注いでいる日常が現在も継続されていることも付言しておきたい。

全体を通して気づいたいくつかの課題と瑕疵について、付言したい。まず冒頭にも述べたが、学位請求者が提示した「遊里文藝」という把握の仕方は、洒落本、黄表紙などの従来の「遊里文学」という枠組みでは、各研究史が、どうしてもジャンル間の障壁の内部に踰躓しがちであり、やや排他的な研究方法が持続されていた感があったのには是正を迫る意義有したのであるが、その反面、「遊里」「遊女」を扱いさえすれば、「遊里文藝」であり、漢詩文であろうが、戯作であろうが、俳諧であろうが、各個の作品ジャンル間の差異や各作家間に存する出自境遇個性の差異に意を凝らすことがおろそかになる嫌いがなきにしもあらずであった点には、今後の研究を進める上で十分に慎重でなくてはならないであろう。また「遊里文藝」の主人公たる遊女、花魁について、当時の人々の視線や捉え方など、具体的にいえば、今日の水商売や風俗営業に従事する女性とは異なり、ある意味では、玄人女性のほうが素人女性より尊崇の念を以て見られていたということがほとんど伝わって来なかったという点も、学位申請者が今後留意すべき課題として残されたと考える。

第一部第二章の『甲斐新話』論は、別に発表した論文を吸収し、再構成された形になっているが、その増補改訂された箇所、30頁には昌平黌の儒官であった植木玉厓の「西駅竹枝」を引用、ある時期新宿という岡場所での特有のしきたりであった「まわし」という習慣の考証に生かしているが、この玉厓の竹枝において、学位申請者は「鶯児」を女郎、「蜂蝶」を廻し部屋で女郎の訪いを待つ男性客の比喩と解している。その解釈自体は妥当なのであるが、このように男女の恋愛や痴情を詠じた詩歌において、「鶯児」や「蜂蝶」を男女の比喩とする手法の淵源は、その折に植木玉厓やその昌平黌での盟友友野霞洲、野村篁園などが中心になってブームとなっていた中国の歌謡体詩歌「填詞」の流行というものが視野に入れられるべきであった。そもそも「鶯児」の「児」字は幼童を意味するのではなく、「鶯」に親しみの意を籠める接尾字で、填詞に頻出する俗語表現であった。なるほど、『全宋词』を繙いて、詞牌「念奴嬌」や「臨江仙」を検すると、人物の暗喩としての「鶯児」や「蝶」「蜂」が頻出する。細部に看取されたものではあるが、文言の詩文についての学位申請者の読解力は相当高いレベルに達していると判断されるが、三言二拍や填詞の援用に必須とされる白話、俗語表現にもまた通曉することが今後の課題となるであろう。なお、この竹枝では「空枝」という語が、男性客が一人で遊女を待つ部屋の比喩とするがそれは134頁の蒲生重章の詩の「空房」も同じ意味で「空」を使っているので言及があつてしかるべきであった。

『甲斐新話』論において、新宿の遊廓特有の「まわし」という風習について論じられているが、この風習にまつわる人情の機微は廓断である落語「五人廻し」に活写されている。「五人廻し」における女郎に待たされる男性客の悲哀は、現代においても、寄席の客の心を掴むものである。このような視点から学位申請者が論じる遊里文藝の現代における意義や普遍性についても論じるに当たっては常に念頭に置かれることが望ましい。その視点は、本論文の問題意識がさらに効果を挙げるためには必須のものと思われる。たとえば、廓断に限らず、落語の世界では、登場人物がほとんど男性で、なおかつ愚昧な者や「呑む・打つ・買う」の道楽者として描かれ、少数の女性はいずれも表面では男性を引き立てつつも要所では、意のままにあやつる賢夫人として描かれることが多い。寄席の観客も男性が多きを占めていたことを考えると、このことは意義深い。つまり、洒落本で多くの武家読者が「田舎侍」「浅黄裏」「武左」と武家を野暮、半可通な存在として描かれているのを楽しんで読んでいたという当時の事情と落語の男性が愚昧な存在として描かれるという構造とが相似形を描いているのである。武家を嘲笑するような洒落本の筆致が、必ずしも町人を武家からの抑圧感から解放するという方向のみ、読者を町人としてのみ、進められていたのではなく、武家の読者が自らがこき下ろされるのを喜んで読んでいたという自嘲という複雑な心理の綾を前提に綴られていたこととなるからである。ここに登場人物の心理描写をひとつの特性とする近代文学に対峙し、それを凌駕する近世文学の可能性が提示されるのである。同時に、遊里文藝を論じるに当たっては、落語の廓断をも研究の射程に入れるべきことが指摘され、学位申請者の今

後の課題となる。

第二部第五章 109 頁で、改題本『高尾外伝』の本文について、元の『紅葉塚』と比較して「意味が通らなくなっている」と指摘するが、引用箇所を見る限り、意味は通じるので、引用箇所と引用方法についての再検討と新たな説明が必要である。

第三部第一章において学位申請者は『艶廓通覧』における「客のまこと」について論じるが、これについては山東京伝の洒落本『吉原やうじ』にすでに言及がある。因って以て比較対照すべきであろう。同じ章 121 頁において『艶廓通覧』専修大学本への書き入れについて論じているが、この書き入れは遊女が一人の客に真情を尽すと必然的に他の客へは嘘をつかなくてはならなくなるという遊里の構造的な問題についてのものであり、これについては「評語」の引用を以て代弁させるのでは不十分で、論者自身の言葉で答える必要がある。

167 頁六行目で資料の翻刻に際して原文において「斗」と見える文字をそのまま「斗」と翻刻しているが、この字は「計」の草書と判断されるので、「計」と直されたい。同じ頁の終わりから五、六行目の漢文の訓読を「精妙の技に如(し)くをことを求む」「数人に如く者」としているが、これはそれぞれ「精妙の技の如くならん」「数人の如くなる者」とすべきであろう。訓読や表記の問題は十全ということにはなかなかならないが今後も精緻なものを目指してほしい。

第三部第四章 153 頁『北里見聞録』の「扇屋花扇事」において、遊女花扇が客をかばった理由について、客の忠義に感激したことだけではなく、自分を頼りにしてくれたことを意気を感じてのこともあったことを指摘すべきであった。

165 頁など何カ所かに大田南畝の名が登場するが、ほとんどにおいて「太田」と表記されていた。「南畝」の号が『詩経』小雅「大田」に由来することを知ればこの誤植はありえない。江戸から明治にかけての人物の名号には、殆どの場合確たる典故が求められるという常識はすでに備わっているはずだが、論文作成の折にはえてしてそうした常識を失念する、審査員のひとりとして自戒の念を籠めてそのことを申し添える。

附論二 176 頁「花勝見の浴衣」は三代目板東三津五郎着物の柄として知られるので、「おどり子」が三津五郎最良であることの暗示を読み取るべきであった。

総じて学位申請者は、遊里文藝、戯作を扱って、合巻が芝居の紙上再現といわれるほどに、遊里文藝、戯作が演劇と緊密な関係性にあることの掘り下げが未だ十分でないとの印象があり、そのことは、今後の課題として残されたといえる。

以上、最後に瑕瑾を列挙したが、それらは本論文全体を貫く斬新にして意義のある問題意識と研究姿勢、研究方法を損なうものではない、以上を以て本論文は早稲田大学の学位「博士(文学)」を授与するのに十分な内容を備えていると判断する。

氏名 長田和也

--

公開審査会開催日	2020年 12月 12日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	池澤一郎	日本近世文学	博士(文学)
審査委員	元帝京大学・教授	棚橋正博	日本近世文学	文学博士
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宗像和重	日本近代文学	
審査委員	東京大学大学院・准教授	佐藤至子	日本近世文学	博士(文学)
審査委員				